

思春期女子の友人関係と母子関係の関連について

— 親密な関係における感情に注目して —

三 輪 友希恵

I 問題と目的

思春期女子の友人関係は非常に特徴的である。もともと女子の方が親密で排他的な友人関係をつくると言われている (Berndt, 1982) が、思春期女子は小グループでまとまることも多く、特にそのような行動傾向が強くなる (本田, 1996) ように見える。しかし、榎本 (1999) が述べているように友人との行動と友人への感情とは必ずしも一致しない。表面的には親密に見えても、思春期女子は友人に対して、本当に友人と思われているか、裏切られないか、といった不安が大きい。この行動と感情のアンバランスも思春期の特徴と言えるであろう。これはどのように説明することができるであろうか。思春期の同性との友人関係は、家族以外との初めての親密な関係とすることができる (Sullivan, 1953)。従って本研究では、親密な関係の発達という視点から、人生の中で初めて親密な関係をもつ対象である母親との関係からの説明を試みたい。友人関係と親子関係との直接の関連を扱った研究はあまり多くはない (岡本・上地, 1999) が、その中では現在の親子関係との関連をみる研究と過去の親子関係との関連をみる研究という二つの立場がある。本研究では、その流れをふまえ、現在の母子関係と過去の母子関係との両方の観点から説明したい。まず、現在の母親との関係という視点から述べる。青年期は第二の分離個体化の時期と言われるが、女子においては必ずしも母親との分離はおこらないと言われている。また、分離があるとしても男子よりも困難であると考えられている (Chodorow, 1978)。しかし思春期には母親への嫌悪感を示すようになる女子も少なからず見られ、そこには依存-反抗にまつわるアンビバレンスが存在すると考えられる。その観点から、母親への反抗によって起こる罪悪感、不安感が友人への感情に影響することが考えられる。次に過去の母子関係について論じたい。母親との親密な関係の質をはかるものとして、愛着という概念がある。愛着については、過去の愛着関係が対人関係のインナーワーキングモデルに影響を及ぼし、現在の対人関係を規定すると言われている。また、その際重要なのは実際の愛着関係ではなく、現在から想起された愛着関係の質だとも言われている。友人との親密な関係が始めてつくられる思春期においては、そこで用いられるインナーワーキングモデルは、以前親密な関係をもっていた母親

との愛着関係の影響を強く受けることが推測される。従って本研究では、想起された過去の母親との愛着関係と現在の友人への感情の関連について調べる。以上のことより、本研究の第1の目的は、思春期女子における親密な友人への不自然な感情と母子関係との関連をみることである。母子関係については特に、現在の母親への反抗と想起された過去の母親への愛着というふたつの観点から検討する。第2の目的は、上記のような関連が思春期女子の特徴であるかを思春期男子、青年期後期女子との比較によって検討することである。

II 方法

1 質問紙の構成：榎本 (1999) を参考に作成した「友人との活動尺度」と「友人への感情尺度」、三輪 (1998) の「現在への母親への反抗尺度」、佐藤 (1993) を参考に作成した「想起された過去の母親への愛着尺度」からなる質問紙を使用した。すべての尺度が5段階評定であった。2 対象：(思春期群) 愛知県内の公立中学1・2年生女子242名、男子248名。(青年期後期群) 愛知県内のA私立短大、岐阜県内のB私立短大の1年生女子合計133名。

III 結果と考察

(尺度の因子構造について) それぞれの尺度について主成分法、varimax回転による因子分析をした結果、「友人への活動尺度」については「親密確認活動」と「相互理解活動」の2因子構造、「友人への感情尺度」については「安心感」と「不安感」の2因子構造、「現在の母親への反抗尺度 (以下反抗尺度とする)」は1因子構造、「想起された過去の母親への愛着尺度 (以下愛着尺度とする)」は「過去の愛着不在 (以下愛着不在とする)」と「過去の分離不安 (以下分離不安とする)」の2因子構造を採用した。

(思春期女子の友人関係と母子関係の関連について) 本研究では、行動としては親密であるにも関わらず、不安が高い、または安心感が低いということを問題とするため、親密行動のある友人をもつ人を対象とする。そのため、親密確認活動尺度の平均得点が3以下の人のデータを削除し、以下の分析を進めた。次に、友人への感情尺度の安心感、不安感の中学生女子の平均値でそれぞれ

高低2群にわけ、全体を4群にわけた。そして、その4群で、母子関係についてそれぞれ分散分析を行った。その結果、反抗尺度については安心感も不安感も高い群は、不安感が低い群に比べて、母親へ反抗している傾向があることがわかった。安全基地という考え方をすれば、反抗するには、そのもとに安心感も必要である。そうであるなら、親密な友人への不安感も安心感も高いという感情は、母親へ反抗している時の感情と似ていると考えられ、母親への感情と友人への感情が未分化であるのではないかということが示唆された。次に、愛着尺度の分散分析結果について論じる。友人への不安感の高い群は、愛着不在、分離不安得点が共に有意に高かった。過去の母親への愛着の質がよくなると、現在の友人への不安感が高くなることがわかった。これは、思春期女子においては、想起された過去の母親への愛着が、友人との関係に用いているインナーワーキングモデルに影響を与えているということであると考えられる。

(思春期男子、青年期後期女子の友人関係と母子関係の関連について) 次に、前記のような結果が思春期女子特有のものであるかを確認するため、思春期男子、青年期後期女子についても同様の分析を行った。その際、友人への感情による群わけについては、その群の平均値で群わけを行った。思春期男子の反抗尺度については、友人への不安感の高い群はより反抗していることが分かった。男子においては、「反抗」と「不安感」という負の感情が関連しているようである。また、愛着尺度については、思春期女子と同様に友人への不安感の高い群は、愛着不在、分離不安得点が共に有意に高かった。男子においても想起された過去の母親への愛着が、友人との関係に用いているインナーワーキングモデルに影響を与えていると考えられる。次に、青年期後期の女子について述べる。この群では、一人暮らしをしている群と親と同居している群でデータの傾向が異なった。一人暮らしの群は大学一年生のデータであるため、一人暮らしを始め

て間もないという特殊な状況であると考えられる。従って、思春期女子との比較については親と同居している群のデータのみを青年期後期群として用いた。青年期後期群では、反抗尺度、愛着尺度共に友人への感情の4群間で差が認められなかった。青年期後期では、現在の母親との関係は同時期の友人との関係とはっきり感情的に区別されるようになると考えられる。また、青年期後期には、親密な友人関係の経験も増えるため、友人との関係において用いるインナーワーキングモデルへの幼少期の母親への愛着の影響は少なくなると考えられる。

IV 総合考察

以上の結果をふまえて、親密な友人への感情と母子関係についての思春期女子の特徴を述べたいと思う。思春期女子においては、母親に反抗している場合、そのアンビバレントな感情が友人への感情と未分化な状態になることが示唆され、それは思春期女子のみの特徴であった。これは、思春期という親密な対象が親から友人へ移行する時期であること、また、その対象が女子では、母親と同性になるからではないかと考えられる。しかし、過去の愛着関係の現在の友人への感情への影響については必ずしも女子のみの特徴とは言えず、むしろ思春期という時期の特徴と捉えた方が妥当であるということがわかった。親密な関係におけるインナーワーキングモデルに対しては、思春期には女子のみでなく男子においても想起される幼少期の母親への愛着が重要な役割を果たすと言えるであろう。以上のことより、思春期青年の友人関係における不安感について理解するときには個別のケースにおいても母子関係を考慮に入れて理解することが重要になってくると思われる。また、今回は母親との関係のみに焦点をあてて研究を行ったが、思春期がエディプス葛藤の再燃の時期であることも考えると父親も含めた三者関係の文脈での研究も必要であると思われる。それについては今後の課題であろう。